

學問と民

佐野一彦

コロポホンのクセノパヘネエスが神はたゞひとりといふことに思ひいたつて、より善いものをさがして見出してゆく物まなびの道を悟りうるためには、六十あまり七とせの年月を胸にヘルラスの國々をめぐるあるかななくてはならなかつた。さうしなければ、馬は馬に、牛は牛に似せて神々の姿をおもひゑがくドコスを脱することなく、ホメエロスやヘシオドスの昔語りをそのまま受けいれて、それを語りつぎ言ひつぐにとゞまつてゐたのであらう。學問もまた親と見る人のいつたことを受けつぐことなくしては成り立ちがたいことは、信仰とすこしも異なるところがなくとも、それにはこれにはない、ものを疑ふといふおもむきがあつて、むしろ言ひ傳へや爲來りにさからふ節をこそむねとするのであつた。しかも、うたがふことは村々や國々のなかにとゞまつてゐたのでは、たとへ若者もいつかは年寄にさからつて見る氣持ちをいただき、世の中の目に見えぬうつりかはりは物識りびとたちの説く傳へをも知らず知らずの間に變へてはゐても、たやすくは起りえなかつたことであつて、その起つて今までの承けつぎをくつがへす力

をそなへるのには、異なる國々にふれあつて、異なる言ひ傳へのむかひたつのを目のあたり見聞きしなければならなかつた。しかし、國々をめぐつてさういふ見聞きをひろめたのは數限られた人々であつたし、さういふ人々の持ちかへつて説く新しい悟りがおもむろに民の心を動かすに至るを待つよりも、多くは先進國との接觸があはたゞしく新しい説きごとを流しいれて、國の前々からの古い傳へを疑はしめたのであつて、そこに學問が起つたのであつた。しかも、進んだ國の文化とのふれあひは、まづ國の上流におこり、上流はよそ國の考へをとりいれると、國の傳へごとを捨てかへりみないばかりではない、いつまでも舊い言ひ傳へに安んじてゐる民を見くだして、事々にそれを滅してかゝつたから、おのれの悟り得たまことを説くのに蒙昧の民をあざけるヘエラクレイトスならずとも、民をいはゞ敵とし、あるいは少くとも民は縁なき衆生に外ならなかつた。學問ははじめから、民をはなれてこそ成り立ち得たのである。もつとも、民の側から見ると、ことに日本では、貴い生れの人々を敬ふ心は、やがておのれも舊い着物をぬいで、新しい教養につかうとしたのであつたが、それはたゞはるかに仰ぎ見てあこがれてみればせめてなぐさむほどのはかない願ひであつた。前々からの爲來りや言ひつたへに架け橋のないよそ國だねの新たなる學問の、わづかばかりの漢語をおぼえ、漢字をすることだけで、文字ある人となつたのは、あまりにみじめな趣きであつたし、しかも、考へて見學んで見ねばならぬはずの事がらは、さういふ文字のおもてには關りなく、むしろその外に、現實の歴史生活のなかにひそんでゐたのであつて、取りついて見た學問には、よそ目には何のかひもなかつたのである。いはゞ大和の朝のみ代から江戸の幕府の時世まで、學問は上にとゞまつてゐたばかりではなく、佛教が兩部習合をくはだて、儒教が人の道をふるひおこしても、この國にとつての新たなる學問は、上から下を強ひ定めただけで、國のうつゝの生活の

びひらけて形をとつたものとは言ひがたく、學者はみ國ぶりそのものを取り上げて、考へて見ようとはしないのが常であつた。歴史をうごかす力は外にあつたのであつて、學問はあとからそれに上への形をあたへたのが高々だといつても、さして強言しやうごとはきこえないのである。

このありさまをまったく改めて、新たななる物學びの道を開いたのは、みづから「みくにまなび」となへて起つた國學であつた。しかもこの「みくにまなび」が、たゞその目あてをみ國において、まづこの國がらと國ぶりとをこそ明らめようとしたばかりではなかつたことは、逆に儒者の側からあらためてこのみ國に目をつけだしたときの趣きをしらべて見ると殊のほか明らかに見てとれるかと思はれる。たとへば近頃はじめて世に出た「見聞談叢」の伊藤梅宇などは、本朝の漢土より勝れたるゆゑんをとくこと、山崎闇齋の垂加神道のたちばをむねとあふぐものときこえ、世の漢學者の「本朝のことにくらく、土風を察せず人情をそらんぜざるゆゑに、ひと役とらせてもらちのあかぬさまなる」をなじつてはゐるが、「日本は言葉ありて後に字をうめる」などといふことを二條家の傳授とてことめづらしく引き、こりや／＼といふ掛けをゑのもとを唐音の可來々々にもとめ、忌み言葉のシホタレを榮華物語にありとて上代すでに常にいへり、などと説いてゐるのでは、まだまだ新たなる物學びの道を悟つたのではなかつた。またもう一つ横から例しをとつて證しとするならば、國學のすぢにつらなる山東京傳の「骨董集」を、漢學者ぶつた瀧澤馬琴の考證にくらべて見るがよく、京傳から喜田川守貞の「守貞漫稿」の國ぶりの學びへ開ける道すぢは、たゞ机の上で唐大和のけぢめなく本と本との間に渡りをつけてゐる馬琴の考證とは、たがひに住む世の中をことにしたものであつた。たゞみ國を學問の目あてにするだけが國學の漢學と異なるすぢではなく、それをこれから別つけぢめは、更らに深い

ところにあつたのである。

山崎闇齋がいたく佛教の習合をいきどほつて道教にもとづくかと思はれる三戸の迷信とともに庚申の佛説をなげうちながら、庚申マチの年中行事をしりぞけず、かへつて中つ世の伊勢神道で（たとへば「御鎮座傳記」、「上代本紀」、「神代口訣」）おひおひ高められてきた猿田彦の神にむすびつけたことに、はやくもこの新らたなる學問の民のみ國ぶりを重んずる趣きはあらはれてゐたのであつた。しかも本居宣長が「玉勝間」（四の巻）で、をしへは猿田彦といふことをしりぞけてゐるのは、闇齋の「垂加社語」の「道者、日神之道、而教者、猿田彦之所導也」にむけられてゐたことに疑ひはなくとも、たゞこの「玉勝間」のことばのうらに中つ世の考へを否定する「いにしへまなび」の立場だけをくみとるのでは未だしといはなくてはならない。これもまた新しい學問がをしへといふものにむかひたてゝものまなびをあらためておこしてゐたことに基くのであつて、闇齋のみ國ぶりに、教へはあつてもまだ物學びはなかつた。宣長の「われにしたがひて物まなばむともがらも」といふ言葉には（玉勝間二の巻）その奥かにふたへのこゝろをふくむかと思はれる。ひとつには中つ世の祕傳とか奥儀とかの學問をすゝめる道にさまたげとなることを唱へたのであつて、これは眞淵から宣長の受けついだたふときさとしてよるものであつたが、さらに二つには、ひとたび定められた事がらのいつとなく變はるべからぬことわりとなつて、上からものをさたすることの僻ごとをしりぞけたとも見え、「儒佛などの教へごと」（直毘黨なほびのたま）のほかに、なほ物まなぶ人の明らむべき道はあつたのであつた。村々や國々のせまき言ひ傳へをよそに、ひろく國々をこえてものゝことわりを見渡してはじめて成りたつた學問の、民の國ぶりをなみしてすました姿を改めてたてなほすためには、かへつて、その理ことわりに住まふ學問が世々の物しりの教へを受け傳へて閉

された趣きを、新らたにあげつらふ必要があり、その學問のかつては置きざりにした民の國ぶりに目を開くことが、いまや「のちの世ははづかし」とおもふ物學ぶみちをさとらしめることになつたのである。ひとたびは言ひつたへを破つて成りたつた學問が、かへつてみづから教への傳へにとちこもつたのであれば、その身動きならぬ理をゆりうてかして見るには、四方の國どこにもあひ通ふ一般をぬけで、國々の異なりにおもむき、民の國ぶりの一つ一つをうつゝに目にうつすべきであり、その國がらをさとり國ぶりをわきまへるためには、ものをそのものとして見る物學びが、弟子は學びの親なる師の至らぬ説きごとを正しおきなひつゝ進まなくてはならなかつたのである。そして、その特殊なるものに向けられた研究の明らむべきものゝ奥かに秘む道は、理の面にさだされて、しかも特殊なるものらの上にならしくはく教へのほかに、なほ成り立つことをまづ悟ることが、新らたなる學問の事のはじめであつた。山崎闇齋の垂加神道のをしへは、かたへに伊勢神道のつたへをひくとともに、神皇正統記にまなんであつたことは、跡部良顯のあんだ「垂加翁神説」のいたるところにうかがふべく、陰陽五行の説きごとを立場に、神の儒教的道德化をはかつて、孔孟の道德のことわりにあてはめて見なければ何事をもうけがふ術をしらなかつたのは、まだくみ國まなびからはるかに遠いものであつたといはなければならぬ。應神天皇を八幡の神と定めて（このことも正統記岩波六三にあり）、「經學はじまりて、まことにめでたき帝なりし」とあがめまゐらせたのは、後の儒者が天皇の政のよしあしをあげつらつて、徳を基においたのと等しく、一般のことわりをもつて特殊を品定めしたのに外ならなかつた。しかもそのことわりとなす朱子學のをしへの等しく或る國のある時世のがながへであつたことをさとらしめるだけでも、宣長の國學はあまたたび言葉をつくしてあげつらはなくてはならなかつたのであるし、「皇統たえず、神器あひつたふる、異

國にもためしなき御事」(垂加翁神説)のめでたさを外にしては、み國をたふとしとするよりどころは、なべて聖賢のをしへにかなふといふのにあつたことは、儒者の常のためしにもれなかつた。あまつさへ、今すこしく「垂加翁神説」についてのべるならば、その引いて例證とする古き歌にも、神道のこの道德化のあるいは合理化の立場はいとよくうかゞはれるのであつて、玉葉集の爲守の「ことわりにそむかぬ道を神やうくらむ」にならべて、「いのちすとも」の歌を金玉抄から菅家の歌としてかゝけてゐるのには、こゝでことの外かんがへて見るかひがあることかと思はれる。

この歌が果して菅原の道眞のであるかどうかは知らないが、「こゝろだにまことの道にかなひなば」といふ思想には、神道の大きな問題がふれてくることは、これが土佛の作とつたへる「大神宮參詣記」の「心にいのることなきを内清淨といふ」^一、^二山房といふのにつらなり、しかも宣長はこの「いのちすとも」を中つ世のからごゝろなりとしてしりぞけてゐることであつた。山田孝雄は祈年祭^{としごひのまつり}の祝詞にイノルとかネガフとかいふ言葉の少しもあらはれてこないことに目をつけて、この土佛の考へ、その北野の天神の歌を、神道のまことを物語つたものと説いてゐるが(古代の祝詞に現れたる思想^{四五})、宣長の「直日靈」^{三三}の説きごとは、「祕本玉くしげ」^{一〇四}にも見える神々のマツリの本質の論ひと切りはなしえぬものであつて、それには「古事記傳」^{一三}、^{一六八}の上つ代におけるカミといふもの考へがひかへてゐる外に、なほ、民の國ぶりをないがしろにせぬ心がまへが、その學問のおもてにあらはれたのを見てとることが出来るかと思はれる。尊き祖神とあはせて、民の家々村々にいつきまつる神々が、名はしれずとも、なほ神として考ふべきものであり、み國の神祭りを説くには、これをなみすることができなかつたばかりではない。「八百萬の神のみ名は、神代の紀にことごとく出でたりと思ふにや。シカトもとより某の神といふ古き傳へのなきを、しひて後

にかんがへて、あらぬ神に定めむは、中々のひがごと」(玉勝間七の巻)といはねばならなかつたのである。されば上つ世のけがれぬ世の姿、人のころのありさまを明らかに「いにしへまなび」は、こゝで今の世の民の國ぶりのまなびに直かに結びつくのであつた。(上つてのべた宣長の考へは伊勢の大官にはかゝらはぬかとも見えるが、なほしからぬことは、伴信友の「神社私考」全集、二、六九—七〇に、大神宮にわたくしの幣帛をたてまつることをとどめらるることについて、「この制は上つ世よりのことにはあらじ、漢ごゝろをもはら用ひらるゝ御代となりてのちの制ならむ」といふ或る説きごとを受けて、「もとよりさること天のしたびとのぬき奉りしことなからむには、そをとどめたまふ制あるべくもおもはれずかし」し(かじか)。今の民俗學すなはち國ぶりの學びが、宣長を祖おやとあふぐためには、「玉勝間」の越後の若くしてみまかりし人を語るくだりのことさら引くには及ばないことであつて、宣長の國學がそのまゝ民の國ぶりのおもてにおもて面向いてゐた姿を見てとるべきであつた。

二

かつては民を見下して成りたち、よろづに通ふことわりを重んじた學問が、ひるがへつて民におもむき近よるためには、まづ今の世の考へのかたくなをとりのぞき、おほひの屋根をおしひらいて、定さだかならぬ姿を物の具なく素手すてにとらへる心ねを養はなくてはならなかつた。曆といひ、文字といひ、なくてはかなはぬと見える制さだめをも、ひとたび捨て、曆法なく文字なき世のありさまをゑがき、かつわかまへて見なくてはならなかつたのである。それが外つ國の制を移しいれたものであつたからには、はるけき上つ代の姿は、さうしてはじめて思ひゑがかれるとともに、その

上つ代の事のありさまは下れる世の今にも國々の民の手ぶりには残つてゐるのであつた。宣長の「眞曆考」は、この新しき學問のいきづきのなかから生れたものであつた。そこではもう古い學問の理や考へごとの手だては役にたつべくもない。しかも「直毘靈」の道なき道、教へなき教へをさとることゝ、この曆なき曆をわきまへることとは一つにして二つではなく、「古事記傳」のはじめの神世には文字なかりしゆゑにかへつて言葉の語り傳へのありしといふ説きごととも、同じ立場にしてこそうべなはれうべきことであつた。支那から曆法のつたはつて來ない前には春秋のうつりかはりの折節をいさゝかも知らなかつたと考へるのは至れる僻事であるばかりではない、空なる月による月と、年の來經と、この二方ふたかたを一つにあはせた曆こそかへつて「まことは天地のありかた」ではなかつたことを、頭についた考への型を拂ひのけて思つて見なければならなかつたのである。さてその「眞曆考」に、「すべて萬づの事を改むるをよきとする國のならばしなれば」唐では「たゞおのが功をみせむとてぞシカジカ中々に民の煩ひとなりて、よき事はいさゝかもなしシカジカ、正朔を改むるは民のわづらひにて、よからぬわざなる事をさとるべし」とある(全集、五)。

心のまことを「めゝしくはかなき」趣きに見て、「をゝしくさかしげなるは、みづからかへりみてもてつけ守りたるもの」と考へた(玉の小櫛全集、七)、ものゝあはれの立場は、すべてよそなるものをしりぞけ、ものゝおのづからをゆがめて外そとからきめつけて成る形をいつはりとしたから、國のみやびもまた國に根おひの、もつて生れた趣きのおのづから開けた姿をこそ正しと考へたが、これにむかひたつ外そとの國ぶりの「つくりみやび」が支那からはいつて來たのを見ると、まづ支那そのものゝ國の俗たひに、うたがひをかけなければならなかつたのであつた。しかも、「すべて漢書は言たくみにして、ものゝ理非をかしこくいひまはし」(うひやまぶみ)といひ、「いと言葉をうるはしくかさりて」(駁)

戎ノ概言をまろつれなごといひ、「君を弑しその國を奪へる大罪を覆ひ隠くし、世の人に信ぜられんがために、己が身の行ひをいたく飾り作りたる強事よきを」(くずばな)といひ、めでたかるべきみ國ぶりのまうらの趣きが彼の國の常であつたならば、それをよしとし勝れりとして受け入れたことには、おのづからを殺してなほ正しき姿を傷つけがした、いはば二重ふたへのあやまちが見てとれるのであつて、さればこそ宣長はひたすらに日本書紀をしりぞけてやまなかつた。「その上の世の中の好みに叶へて、ことごとく漢史かんしぶりに改めて、詞にその方の潤色かきりの多かるのみならず、事にさへ意こころにさへ、その潤色かきりを加へ」たゆゑに、「大かた上つ世の意こころはうづもれ果て世に知る人なくなむ成れりける」(神代紀誓華山蔭うづのやまかげ)といふなげきは、今もなほ人の心を動かさずにはゐない。もつともこれは、眞淵このかたの「こゝろことば」の立場の根に深くひそんでゐたところから、まづ説いてかゝらなければ、わきまへがたい事かと思はれるが、國學も平田篤胤にうつると、「實事じつじ」をめあてにおくので、漢ごゝろはしりぞけても、書紀をも中つ世の文をも「古實」だによみとれるものならば、あへてしりぞけようとはしなかつた事は、「古史徵開題記」のあきらかにしめてゐること、
 「うたのまなび」の傳統の「いにしへまなび」を貫いてゐたのは、宣長までであつたかとも思はれる。たゞこの「こゝろことば」の立場をひとまづ離れてみても、宣長の書紀をしりぞけた心根はゆゑあることであつた。それは、大化の改新にむかつての宣長の立場につらなり、しかも、そのいづれにおいても、み國ぶりの民の手ぶり、民の心にこそ生々と息づいてゐることをみとめ、上流のかへつて外つ國まねびのあだし心に成り果て、あまつさへその民にうしはき民のわづらひをかへりみぬ革新は、つひにはめでたき國ぶりをほろぼすことをいませしめたのである。

「うひ山ぶみ」には「すべて何事も古へのみ代に漢風かんふうをしたひ用ひられて、多くかの國さまに改められたるから、

上古の式はうせて」(岩波)とあるのを、「古事記傳」の卷の十三(全集、四)と「歷朝詔詞解」(全集、五、三〇、三四)とではまともにもそれと指さして、大化の改新をみちびき、かつ爲おほせた人々をさたする宣長のあげつらひは殊のほか手きびしかつた。み國ぶりをなみした外つ國まねびの改革が國のみやびをそこなひ、やまとごゝろのすたれ來た事のはじめであつたといふよりも、もうそのあげつらひの穂先は改新につくした人々の心ねにくひいつて、きたなき下心をあばかうとするのである。「よろづに聖人ぶりを好みたまひて、中々のうはべのつくるひの」うかゞへるうらには、まことは我がためをはかられし「陰謀」がひそんでゐたのであつて、かく強いて「悉く漢國の制にならひて新に定め給へる」ゆゑにこそ、「不改常典」とは「重しく嚴かに詔りたまふこと」を必要ともせられたのであつて、書紀の「もろくの詔ども、言は古へながらに、その意は漢なることの多くまじれるは」おほくはこの時よりぞ始まりつらむ、と説くのを見れば、また祝詞の宣命ぶりと詔勅の漢文體とがわかれて、古への祭政一致がやぶれたのも、その事の始めはこゝにあつたかと思つてゐると言へる。すべて事を改めてよしとすることの、まことの政ごとの道ならぬゆゑは、まづこの上にたつ人のおのが功を見せむとし、おのれがために計らむとすることにあるのであつた。このことについては、なほ「眞曆考」(全集、六、三三六)、(三三六)、「眞曆不審考ノ辨」(全集、六、二五九)、(二五九)、「臣道」(全集、六、二〇二)、(二〇二)、「直日靈」(岩波、三三三)、(三三三)、「玉くしげ」(岩波、三〇〇)、(三〇〇)、「秘本玉くしげ」(岩波、四四〇)、(四四〇)などにも出てゐる。しかし、その心の奥かには、政事の民を重んずべきよしの考へがこもつてゐたことは、ことに「臣道」の説きごとに照らして疑ひのないところであつた。その「臣道」に「大御神は、よく治めよとてこそは依し預け給ひけめ、天の下の人草ひとりも大御神の大御寶にあらざるはななければ、いかでおほろかには思ひ放ち給ふべき」(全集、六、二〇二)、(二〇二)といひ、「いさゝかも禍津日神にあひまじりて、外つ國書にまどひて、本を忘れ、私こ

ころをまじへ、横さまなる方にすゝめいさなひ奉りて、民を苦しめ、國のためにも上の爲めにも、うしろめたき行ひあらむは、まさに天照大御神の大御心に叶ひなむやも」(全集、六)とある。これをひと言であらせば、臣たるの道は「君と民とのみ中とる」(全集、六)ことであつた。さてしかし、こゝで何故にかくも民を重んずる考へをかくも力強くとなへたのであつたか、そのもとの意(こころ)を事(こと)わけてわきだめわきまへておかなければなるまいかと思はれる。儒教もまた下に居る人の道を教へるならば、かたはらには上に立つべき人の道をとき、ことに政ごとの道徳は人の人たる道徳ときりはなして説いてゐるのではなかつた。その民を重んぜよといふことのたゞ國學にばかり生ひたつべき考へではなかつたはずである。

三

宣長が國の政ごとのさまを説いて、民を重んずべきことをさとしたことは、私のさかしらをしりぞける立場がひかへてゐたことを知らなければならぬ。改革のしりぞけらるべきゆゑんは、上にのべた、わがためを計り、おのれの名譽心をみたす邪(よこしま)き心(こころ)のみあつたのではなく、すべて私のさかしらが神のみ心のまゝなるおのづからをなみせむとする心のはたらくところにあつたのである。世の中に善きも悪しきもありとあることは神のみ心に出づるのであつて見れば、しひてことごとく善きに改めむとし、改めねばならぬと考へることは、いづれも小さき私のさかしらに基くはからひであつて、宣長のいふ「わたくし」とは私慾や利己にはかぎらなかつたのである。たとへ身を道徳に高め、國のおほやけに捧げる志にいさゝかのいつはりを感じずとも、その善しとうけがひ改むべしと見ることの、お

のれの小さき理ことわりに基くわきだめによるものであつたならば、それもまた「わたくし」としてしりぞけねばならないものであつた。こゝで宣長が合理主義にそむく姿をふたゝび見なければならぬ。民を重んぜよといふことは儒教の道徳の理ことわりにはかゝはらなかつたのである。それはむしろ、神のみ心のまにまにある世のことごとくに人のさかしらをあへてすべからぬ事の、事のおのづからの成りゆきであつて、道徳のはかりにかけて善し悪しを定めて見たのでは、政ごとを執る人のまことの道にはまだゆきつくべくもなかつた。かしくも、世々のすめらみことは天照大御神のみ心を見心と治めたまふのであるからには、その命みことをうけて政ごとを行ふ人々は、また神々のみ心のまにまに執り行ふべきであつて、それが民を重んずることになるのは、「天の下の人草ひとりも大御神のおほみ寶」ならぬはなきゆゑであつたとともに、また民の手ぶりがことごとく神のみしわざにもとづくものだつたからである。それゆゑまた民を重んずることは、うはべに民の命いのちを重んじ、民のくらしを安くし、民の樂しみをますことに盡きるのではゆめゆめなかつた。ひとへに理ことわりをもつて民の幸福をますことは儒教でも考へても、いかに生き、どう暮し、どう樂しむかは、たゞ善し悪しをきめるだけの道徳の立ちいることの出来ないおもてであつた。しかるに國學は、そのおもてに立ちいつて、生き方の、手ぶりの、みやびの、みくにぶりなるべきことを説かうとするのである。このみ國ぶりを民に見とめるゆゑに、民は重んずべきであつたのであり、國ぶりをなほざりの、たゞ道徳のみひとしなみに説いて足れりとする儒教とは、これはまつたくちがつた趣きの政治論であつたことを、あきらかにわきまへなければならぬのである。

かくのごとく宣長の政治論は、これもその學問が民に趣いた姿の明らかなる證しとして見ることが出来る。しかし、今の世の民にくみする社會主義者の好んで引かうとする「これを思へば今の世の百姓といふものは、いともいともあ

はれにふびんなるもの也」といふ「祕本玉くしげ」(岩波)の言葉などは、上にのべた事がらをもととしてこそおのづから出で来たものであれ、國學にとつては、百姓の不便はいはゞ事の末であつた。そもそも宣長の「たみ」と言ふ言葉の意が民主主義の心にゑがくものとは異なること、あたかも儒教のわかまへえた民といふものゝ國學の抱いた民の意味と一つことならざるに等しい。民は上からをさめらるべきものとして、また時にはうしはく君に抑へられ使役せられるものとして、下にある大衆ではなかつた。たゞ上下の關係にわかまへられる、いはゞ空間的な圖式のなかで、ひとりひとり立つ瀬がなくとも集れば一かたまりをなして力をそなへるといふよりも、「天の下の人草ひとりも大御神の大御寶」といふ事のもとには、民が國の歴史をになつた國民であることが思ひゑがかれてゐたのである。これは宣長の考へのごとくに歴史的な趣きから推しても悟らるべきことかと思はれるが(この歴史的なるものゝみかたにつきては、Ueber den historischen Geist des Motoori Norinaga、神戸商業大學論文 紀元昭和十五年)でひととほり述べた)、また宣長が封建の制をたゞへて郡縣の制をしりぞけたことをもこゝに考へあはせて然るべきことと思はれる。「あづま照る神のみことこの安國としづめましける」(玉鉾百首)徳川の世をたゞへた心にはへつらひはなくとも、その住む世に事足りて、やがて來るべきあるべき世に目をふさいだ傾きを見過ごすわけにはゆかないとしても、それには封建の古へからのおのづからなる人の間がらに基くのにくらべて、郡縣の上から民にむかひたつ役人を設けならべて、民の國ぶりをないがしるに政ごとする強事をうべなはない心はたらいてゐたことを認めなくてはならないのである。明治維新をうながしたといふ國學がこのふしにおいてはおかへつて徳川の世にくみしてゐたことは、たとへば「嚶々筆語」巻一にてゝある西田直養の言葉にもつともあからさまにうかゞへるのであつて、「マツリごとといふものは、西土にては帝王み

づからとりおこなふものなるを、皇國にてはしからず、政のよみは祭事マツリゴトといふ説きごとあれど、事のもとマツルコトは奉仕事マツルゴトなるべしと鈴屋の翁のいはれしごとくシカジカ、されば臣下に世のこゝろをまつりごたしめて、天皇はその事をきこしめしたまふなり」ともいつてゐるのであり、されば徳川の世は「上つ代のさまに立ちかへれる大御代なり」と結んだのでは、もう國學のルネサンス運動といふものも、あしたにはたらく力を失つてしまつた。たゞ郡縣がともすると民の歴史的意義をなみする傾きを帯びてゐる限りは、徳川の世はかへつてみ國ぶりと見られたのであり、このことを、漢學や儒教のその世の道義をとりて人のおのづからをみとめぬ徳主義をしりぞけた國學の、心のあらゆるくまぐまをよきもあしきもいさゝかのいつはりもなく歌ひだすことにかへつて人のまことを見、道ならぬ戀、今はの歎き、命の惜しさをもそのまごゝろのゆゑにたふとんだことゝ、行きちがふかの如く思ふのは未だいたらぬ考へであつた。宣長の「ものゝあはれ」は人を封建の世の道德のきづなから解きはなつものではあつたが、ときはなたれてひとりひとりが、たがひに結びあふ間がらをないがしろに歴史のそとへたゞよふべきものであつたならば、これも儒教の道德主義とひとしくしりぞけらるべきさかしらなる考へかたであつたのである。

されば、宣長が人の生れの貴き賤しきわきだめをたふとんで、漢くにまの才ありはたらきある者を身は賤しき中からもえらび抜んで用ひる事をそしつたのにも、その考への奥かには、民を並びたつひとりひとりの集りとは見ずして、歴史の流れにあひ次いで生きるものと見た立場がひそんでゐたのであつた。のちに篤胤が姓氏録を重んじて、「姓氏のまなびをなほざりに心得まじき」むねをのべ、「漢國人の賢まかしだてるを貴ぶならひ」にむかへて、「天の下に又なくたふとき現まつみ神のみ心のまに／＼、おの／＼らが爲めには善くも悪しくも従つかへひ奉仕つる」をみ國の大きき道と説いた

のも（古史徵開題記卷一之）、これにもとづくものであった。さてこの下下はたゞつかへまつるといふ考へは、宣長ではことに、「そもく道といふものは上の行ひ給ひて、下へは上より敷き施し給ふものにこそあれ」（うひ山ぶみ岩波二九）と見え、これもまたみ國ぶりが漢風のよしあしの理を超えて位するところにもとづき、されば「學者はシカジカ私に道を行ふべきものにはあらず」（同上岩波三〇）といふ學問と政治との關係の説きごとにもつらなるのであったが、政ごとは上の行ひたまふものといふのには、「千萬御世のみ末のみ代まで、天皇命はしも大御神のみ子とましまして」あだし國の「定まれる主なくしてシカジカ賤しき奴もたちまちに君ともなる」（直毘靈）とはことなるみ國の國がらの大もとが見きはめられてゐたのであつて、下々は誰れも上にます天皇命の神世よりの家の子であり生みの子であつた。しかも、君臣猶父子といふことは、儒教でも説いたをしへであつたけれども、これは謂はゞ喩へ事であり、道といふあげつらひは見えても道はなき國のならばしの（直毘靈）、み國の國がらとは異なる面をこゝろえずしては、國學のむねと説く國がらをわきまへるにはまだまだ遠く、世々のすめらみことの「徳」をたゞへるのがせめてもの考へかたであつた。「徳」といふものを中におかないでは、儒者にはこれを説くすべはなかつたのである。「まがのひれ」の作りぬしは「されば大神も天皇あしくますと、そのみことのり必ずうけたまはるべしとは宣りたまはぬをや」などといつてゐるのは、この事のさまをあらはしてゐる最も明らかな例しかと思はれる。宣長の答へに「もし父には是非なきときは従ふべくは、君にも是非なき時は必ず従ふべきなり」といひ、「なほその君のみしわざ悪しくまし／＼て従ふにしのびず思はゞ、楠のぬしのごとくこの世を去りて夜見の國にまかるより外なきことゝ知るべし」（くず花全集四八三五）とあるのは、もともと別ものゝ君臣と父子との關係の上で父子に重さをもたせて考へて、しかるのちに君臣の間がらを父子

の間がらになぞらへて説くことの、み國の考へとはいたく異なるむねを論はむとしたものであつて、これを明らかにするためにあしき天皇といふ假り事をまうけたのは、事のむねをわきまへるのには、最も手みじかな手だてであつた。神と人、君と民、いづれも日本ではもともと親と子とであつたから、たとへ親がわるくても、子はどこまでも仕へなければならぬのであつて、親子の間がらは道德のきりはなし得るものでもなく、まして氣まゝに結びかつ解くべき絆とはいへないのと等しいことであつた。山田孝雄の祝詞のときごとに「いのらずとて」を神祭りのものと旨としてゐるのも、こゝを踏まへての事であつて(まへにひきし文、の五〇、六八)、こゝではマツリゴトをマツロヘゴトと解いた宣長も同じ考へであつた。「歷朝詔詞解」の高野の天皇のくだりに「世にましましゝほどはいさゝかも下よりはからふことなく、天皇のみ心にしたがひ奉りて、神去りましゝのちにいたりてすら」道鏡をかく罪したのは「かにもかくにも天皇のみしわざを片はらより計り奉る事なく畏み従ひ奉りたる」ゆゑであつて、「いにしへの正しき道のさすがに残れる」のであつたことを説いたのは、「あらずふ人のなかりしにや」といつてゐる「神皇正統記」の、まだまだまことに心得えなかつた國がらであつた。しかもこの國がらの學びの國ぶりの學びとときはなされて説かれてゐなかつたことが、宣長の國學の今の世の國體論の多くとことなるところであつて、だから國學のみ國がらの説きごとには、道德のあげつらひはいらなかつたのである。人は神の子であり、かしこも世々のすめらみことは民の親にましまし、臣たる人のつかへまつる道は「君と民とのみ中とる」のにつきたのであれば、その國ぶりと時世の趣きをこえて、おしなべて人の人たる道を説かうとする學者の政治論がそら事であり、物學ぶ事のもつむねを忘れて、いたづらにおのがわきまへえた理を強いてさかしらに政ごつことのしりぞけらるべきゆゑんは明らかであつた。物知りびとの智も國の歴

史に埋れて民の心に生き、上のそれをとりたまふに至るまでは、まだまだちひさき「わたくし」に過ぎなかつたのである。

四

學問は民におもむくとともに、ひとりの學者の考へのいかんともなしがたい歴史の現實につきあたつた。世の中ありとある事々が神のみ心であるならば、それをそのままにながめ、世々の趣きのまにまに神のみ子にます天^{すのらみこと} 皇につかへまつるより外に務めはなかつたのである。宣長がかたへには中つ世のありさまをしりぞけて世を古へにかへさうとしながら、さとりえたみ國の道についても、「道にかなはずとて世に久しく有りならひつる事をにはかにやめむとするはわるし」といひ、「萬づの事は起るも滅ぶるも、盛りなるも衰ふるも、みな神のみ心にしあれば、さらに人の力もて得うごかすべきわざにはあらぬ」ことをこそ、「まことの道をさとり得たらむ人は」心得べきでありとさとし(玉勝間^二)、「すべて何わざも古へをたふとまむともがら、おのが心にふさはしからず、思はむからに、今の上の御おきてにたがひて守らざらむは、いみじくもかしこき私なりかし」(同上^三)といましめ、「古への道によるとして、上の政も下々の行ひも、強ひて上古のごとくに、これを立てなほさむとするときは、神の當時の御はからひに逆ひて、かへつて道の旨にかなひがたし」(玉くしげ^三)と説いたのは、考への亂れでも心の弱さでもなかつた。むしろその立場にこの矛盾をふくみ、ひとむきに事を強ひなかつたところに、歴史を重んじた學問の深さを見とめなければならぬのであつて、考へえた事も考へえただけでは、うつゝに何の甲斐もないことを悟つた言葉であつた。民の心と行ひと

に生きてゐなければならず、さう生きうる特殊がむしろ國がらにもとづき國ぶりにかなひ、國のすべてに通ふ「おほやけ」となり、考へごとの理のめざす一般はかへつてひとりひとりの「わたくし」ごとだったのである。このやうな悟りは、徳川の世の文化が前の代々のとはちがつてひろく民衆にひろがつたといふことだけでは説きあかすべくもなく、また學者がおり立つて里人の間に道を説いた心學のゆきかたともひとしなみに並べて見ることのできるものではなかつた。民に交つて道を説いた心學も、そのさす教へは國學の學びかつ明らかめむとしたものとは行く手をこととしたのであつた。

國學も平田篤胤に至ると、宣長の歩いた道をやゝ離れたかとおもはれる。「なをまのつれなご願戎慨言」もあだし國をひとへに撃ちほろぼすべしとはゆめゆめ説かず、かへつて秀吉の朝鮮征伐のならざりしよしをなげいて、その「これぞと見ゆるしるし」なかりしを、「心なき虎狼とらまはかみよりけにいちはやくあらびつゝ、朝鮮の罪もなき民どもをいたくなげ掛ひ苦しめ」たゆまかと思（全集三三、六）、はるけき四方の國々は、さかゆくみ代としならば、おのづからまつろひまゐらむことを思ひゑがいてゐるが、なほ外つ國のこととは皇國みくにのみやびにむかひたつ異なるものであつた。日本にだけ古への正しき道は今にとはは榮えて、外つ國は人のさかしらに墮ちぶれてゐるのであつた。しかるに篤胤が、このみ國の外つ國とはことなるすぢを重んずるよりは、ともするとかへつてよその國々にも等しく見るといふよしを、おのれの説きごとの正しかるべきよりどころとして引かうとしたのは、とつ國のものごとをもまた神のみ心のまにまにあるといふ内にふくみいれて考へたからであつて、さうすれば、特殊がふたゝび一般にひろがつたことは、進んでは、およそ正しさのゆゑよしを「よく實事まことのむねにかなひて萬づの理にあはざることなき」（古史徵開題記附四〇）にもとめたところ

に更らにいちじるしい。これは「みくにまなび」の大いなるうつりかはりをあらはすとともに、ふたたび新たな學問の生ひ立ちをつけしめすものであつた。宣長のためらひとどまつたところから進み得るのには、この新たな立場が、もうひとつの面^{おもて}すなはち「こゝろことば」から「實^{じつ}ごと」へ移りゆいたことと共に、必要であつたし、明治このかたの國のおもむきは、篤胤のこのあらたなる國學をとほり來つたのでなければ、宣長の物學びとはあまりにかけ離れてゐたのである。そこに學問と民との關係が如何なる形にあらはれて來、それが今の日本にとつてどれだけのいさを認めらるべき事の成りゆきであつたかは、この篤胤による新たな學問の姿をもう少しく説き明したあとでなければ言へないのであるが、明治このかたの西洋うつしの學問がふたゝび大和の朝^{みかど}のみ代にはじまる漢學のごとく、民のみ國ぶりをないがしろにしたものであつたならば、今ひとたび「こゝろことば」の立場にかへつて見るのもよいかと思はれる。ただ篤胤の學問を荒唐無稽ときめこみ、もの見きはめも事のわきだめもなくして鼓吹煽動に終つたかのごとく見過ごすことは、今の世に新たな學問をたてむとする人のなすべからぬことであり、しかも宣長なきあとの國學の思想の發展のみちは、今の思想史研究のもつともなほざりにしてゐる面^{おもて}かともおもはれる。この書きものそこにはまだ立ちいることが出来なかつたことは、なほよく考へて改めて世に問はむためであつて、ゆめゆめそれがないがしろにするこゝろざしにはよらなかつたのである。(昭和十五年十月二十三日)